

◆原著◆

セーフティプロモーションの担い手である市民ボランティアの変化

山田典子¹⁾、山田真司²⁾、川内規会²⁾、新井山洋子³⁾、長瀬比佐子³⁾

1) 札幌市立大学

2) 青森県立保健大学

3) 十和田市セーフコミュニティメンバー

Changes in Citizen Volunteer' Participation in SC Activities as an Important Part of Safety Promotion

Noriko Yamada¹⁾, Masashi Yamada²⁾, Kie Kawauchi³⁾, Yoko Niiyama³⁾, Hisako Nagase³⁾

1) Sapporo City University

2) Aomori University Health and Welfare

3) SC TOWADA member

要約

目的: 市民ボランティアの、SC活動参加による変化を明らかにすることを目的とした。

方法: SC認証に至る市民活動に関わった市民ボランティアの逐語録から「市民ボランティアの意識、態度、行動」に関する文脈を抽出し、意味内容の類似したものをカテゴリにまとめ分析した。対象者のセーフコミュニティ活動期間は2008年4月から2010年3月で、グループインタビューは2010年2月に1回実施した。

倫理的配慮として本研究の実施にあたっては、所属研究倫理委員会の承認を得て実施した。

結果: 約30名の参加者のうち8名が研究参加した。市民ボランティアの内訳は、民生委員、保健推進員、公務員OBらで、年齢は49歳～72歳、全員が女性であった。

SC活動に参画した市民ボランティアは、【地域住民への関心】からSC活動へ意欲的にかかわり、住民同士がつながり、市民としての自律と自治の意識が芽生える、といった価値を見出していた。

考察: 情報を共有し学びあうことで【市民活動の促進】がなされ【SC活動が継続】する。さらに、行政や多組織と目指す方向を共有化でき、使命感を持って取り組む姿が見られた。また、SC活動継続の秘訣は、市民ボランティアとして活用され、自分の視点がSC活動に活かされる機会が得られ、ボランティアが抱く「SC活動に対する使命感」が活動を促進させ、継続されていた。

キーワード: セーフティプロモーション、市民ボランティア、認知、行動、変化

Abstract

The objective of this study was to determine the changes in citizen volunteers' participation in safe community (SC) activities as part of SC certification for the promotion of safety.

Subjects: Citizen volunteers who were involved in civil activities to obtain SC certification. The group interview was conducted in February 2010.

The "consciousness, attitudes, and behaviors of citizen volunteers" was extracted verbatim from records to categorize contents with similar meanings, which were then analyzed.

Results: Of approximately 30 participants, 8 were enrolled in this study. Details of the citizen volunteers were as follows: local welfare officer; member of health promotion activities; volunteer to assist the elderly; volunteer to assist the challenged; nurse; ex-public officer; hospital volunteer; and housewife. Their ages ranged from 49 to 72 years old, and all participants were female.

Citizen volunteers who participated in SC activities were eagerly involved in the activities because of their "interest in local residents" and stated the value of the activities as follows: A connection is created among the residents, and, as a citizen, consciousness of autonomy and self-government arise.

Discussion: Sharing and learning information "promotes civil activities" and "aids in the continuance of SC activities." The volunteers can share the targeted goals with the administration and various organizations. We found that the volunteers work with a sense of duty. The key factors for citizen volunteers to continue working on SC activities were to remain active as a volunteer, to have the opportunity to express their viewpoint and see it carried out, and to remain involved.

Key words: Safety promotion, Citizen Volunteer, Recognition, Behavior, Change

I. 諸言

本稿で述べるセーフティプロモーションは、1970年代後半にスウェーデンのファルショッピング市で展開された Community Safety Promotion を中核に約30年の歴史を持つ取り組みである。1989年に開催された第1回世界事故・外傷予防学会において「すべての人々は健康と安全に対して平等な権利を有する」というストックホルム宣言を採択している。セーフコミュニティ（以下、SC）活動の理論的枠組みはセーフティプロモーションである。セーフティプロモーションは、組織の壁を越えて部門横断的な連携に基礎を置き、個人のみならず地域社会の関与や支援の必要性を説いている^{1)~6)}。

セーフティプロモーションが対象とする課題は、災害、事故（交通事故、転倒などの家庭内の事故、労働作業環境での事故等）、暴力（他人からの暴力、児童虐待、DV、いじめ等）、自殺等である。これらの課題解決は、部門や職種の垣根を超えた協働を基本としている。また、セーフティプロモーションの主体は、外傷予防に関連のあるすべての人々や機関である。よって、保健、福祉、介護、交通、観光、警察、消防等関連する行政機関や、医師会および医療機関等が主体となる。そして、企業、地域団体、NPO、マスコミ、市民ボランティア等がセーフティプロモーションの担い手となる。このように、セーフティプロモーションの担い手は部門も職種も多様なメンバーであるため、横のつながりを強化し、多種多様なメンバーが協働できるための基盤整備が重要である。

日本ではセーフティプロモーションのコンセプトが紹介されてから日が浅く、国内文献を概観するとセーフティプロモーションおよびセーフコミュニティに関する原著論文は10数件にとどまっている。さらに市民ボランティアや住民組織活動に焦点をあてた原著論文はみあたらなかった。

海外文献を safety promotion, community, コミュニティオーガニゼーション、で検索したところ121件の文献が抽出された（2012年8月現在）。それらの文献を対象別、内容別に分類したのが図1,2である。調査の対象としては、「乳幼児から学童」16件、「成人」15件、「思春期～青年期の若者」13件であった。また、調査の事由としては、「組織」11件、「予防活動」10件、「労働の場の事故」、「交通事故」、「政策」や「プログラム」が次いでいる。また、内容は、「活動報告」61件、「調査、サーベイランス」31件、「教育、研修」19件、「評価」8件となっている。活動報告の中で住民および市民ボランティアの意識について触れているものは2件であった。

本邦では2013年2月現在、6つのセーフコミュニティが認証されている⁷⁾。その中でも公衆衛生医と保健師がコーディネートしてWHOによるセーフコミュニティ認証を達成したQ市は、保健師の地区活動が盛んで1990年

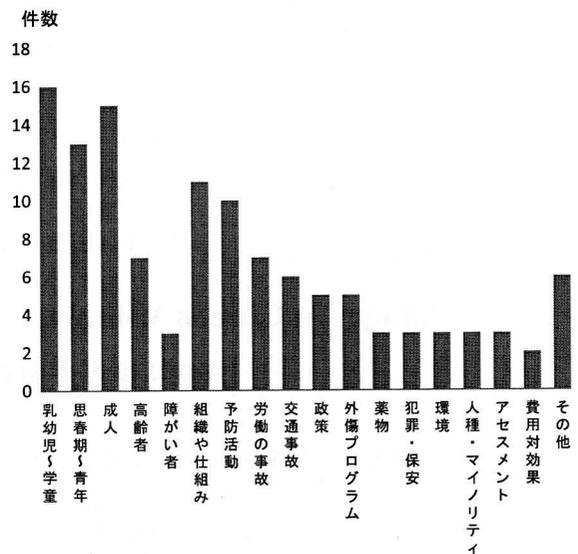


図1 住民組織活動と安全に関する海外文献

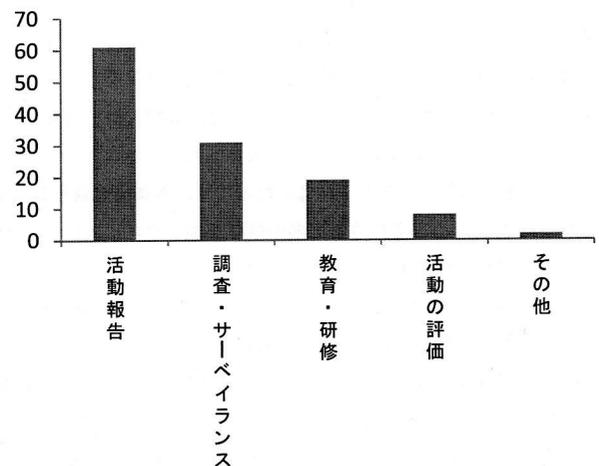


図2 海外文献でSP,SCに取り上げられた内容

代より市民とヘルスケア部門のスタッフの研修を開催し、人材育成と能力開発に取り組んできた。公衆衛生看護の視点を持った保健師が継続的に後方支援し、精神障害者のボランティアが育成され、家族会がたち上がり、2010年から自殺予防の相談の場が市民ボランティア主体で運営されている^{8)~10)}。

Q市では2006年6月から有志によるセーフコミュニティ勉強会を定期開催し、2007年1月にはセーフコミュニティを実現させる会が発足した。公衆衛生医や保健師が行政関係者への説明や研修を介し、セーフコミュニティ認証を目指すための活動をけん引した。毎月の勉強会では、セーフティプロモーションとは、「住民が平穏に暮らせるようにするため、事故や暴力、および、その結果としての外傷や死亡を、部門や職種を超えた協働で科学的に評価可能な介入をし、予防しようとする取り組みである」ことを繰り返し説明し、様々なバックグラウンドを持つ参加者への普及啓発に努めてきた。

そこで、SCに取り組むまちの市民ボランティアに焦点をあて、セーフコミュニティ活動を市民ボランティアや住民がどのように理解し、受けとめ、変化しているのか明らかにする。

II. 方法

1) 研究期間

研究参加者のセーフコミュニティ活動期間は2008年4月から2010年3月で、グループインタビューは2010年2月に1回実施した。

2) 研究参加者の概要

市民ボランティアの中には、業務としてSC活動に従事しながら、業務以外の時間でSC活動に参加する公務員も混在している。ボランティア市民の理解や変化を明らかにするため本研究参加者は、SC活動に参画してきた行政職員以外とした。定例会議の場を借りて約30名の参加者に研究協力の呼びかけを行い、研究参加の内諾を得た者に再度文書および口頭で説明し、同意をいただいたボランティアとした。

3) 分析方法

録音されたインタビュー内容から逐語録を作成し、観察記録やSC定例会議や事業参加時のフィールドノート(A4版352枚)のデータを追加した^{11)~14)}。

逐語録から「市民ボランティアの意識、態度、行動」に関する文脈を抽出しコードとした。得られたデータはKJ法を用い質的定性分析を行った。KJ法は川喜田二郎が文化人類学のデータをまとめるために考案した手法である¹⁵⁾。データをカードに記述し、カードをグループごとにまとめて、グループ編成する。数多くのカードの中から似通ったものをいくつかのグループにまとめ、それぞれのグループに見出しをつける。それを図解し叙述する。

4) 真実性、妥当性の確保

グループインタビューの真実性、妥当性を高めるために、SC活動の「自殺、転倒・転落、交通事故、暴力・虐待、スポーツ・観光、子どもの外傷、災害」の7つのプログラムに関与している市民ボランティアのリーダー格の方々に参加してもらった。SC活動のプログラムの内容をよく知っている市民の意見を反映することで真実性の確保に努めた。また、職業や活動内容に偏りが生じないように配慮した。インタビュー項目の設定方法は、SC活動を通じて体験した出来事や感じていることとし、具体的に表現できる内容とした。半構造化した質問内容とすることで、参加者が自由に意見を述べ、意見交換により内容が深まっていくよう配慮した。妥当性のかく乱要因のひとつに、一方的に強い

意見を主張したり、他者批判に傾く発言が予測された。これらのかく乱要因を除去するため、参加者が強い意見に誘導されたり、意見が出しにくくなることのないように、インタビュアーは配慮し、リラックスした雰囲気の中で参加者の自由な発言を促し、効果的なグループダイナミクスが起こるようにした^{19)~21)}。さらに、インタビュー終了直後の記憶の新しい時期にデータの処理を行い、研究参加者らに当人が話した内容が一致しているか個別に確認した。解釈の客観性を保つために、看護学、コミュニケーション学、健康計量学、論理学の4名の研究者で分析内容の検討を行った。意見が分かれた際は、2008年4月から2010年3月の参加者のフィールドノートを参考に議論し、解釈の共有を図った。さらに、後日、分析結果について研究参加者に公表し、解釈に誤りがないか確認することで分析データの確実性を高めた。

5) 倫理的配慮

研究参加者に研究目的と方法、参加への自由意志の尊重、プライバシー遵守、VTRやICレコーダーによる録音・録画の同意、これらのデータの保管と個人が特定されない処理をしたうえでの公表等について、口頭と文書で説明し、質問に応え同意書を交わした。本研究の実施にあたっては、所属大学倫理委員会の承認を得て実施した。

III. 結果

1) 研究参加者の属性

研究参加者は、民生委員、保健推進員、高齢者ボランティア、障害者ボランティア、看護師、公務員OB、病院ボランティア、主婦等の合計8名であった。年齢は49歳~72歳で、全員女性であった。

表1 研究参加者の概要

識別ID	年齢	性別	職業
A	49	女性	病院ボランティア
B	49	女性	高齢者ボランティア
C	51	女性	主婦
D	55	女性	看護師
E	55	女性	保健推進員
F	63	女性	障がい者ボランティア
G	64	女性	公務員OB
H	72	女性	民生委員

2) 3つのレベルの変化

SC活動を通じて体験した出来事や感じたことに対する回答を基に、SC活動について市民ボランティアが理解し取り組んでいく過程と、その変化について「感覚」「思考」「意志」という観方ができた。ここで「感覚」は、視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚等の五感を活用し、身体レベル

でSCについて感じる事。「思考」は、SC活動について五感を通して考えたり思いをめぐらせたりすること。「意志」は、心の中に思い浮かぶ何かをしようとする目的の選択であり、その実行のために要する手段を思考すること、と本稿では定義する。

以下、カテゴリを【 】, サブカテゴリを《 》で示す。本研究テーマに沿ったコード数は174コードであった。感覚レベルでSC活動を理解するは、【地域住民への関心】

【SC活動への意欲】【SC活動の実感】のカテゴリで構成された。思考レベルでSC活動を理解するは、【SC活動から見出した価値】【SC活動の魅力】【SC活動の収穫】のカテゴリで構成された。意志レベルで取り組むSC活動は、【市民活動の促進】【行政への要望】【SC活動継続の秘訣】のカテゴリで構成された。市民ボランティア活動の促進と後退は、【SC活動への使命感】【市民活動の減退】【活動の不安】のカテゴリで構成された。

表2 感覚レベルでSC活動を理解

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
地域住民への関心	高齢社会の課題	高齢者率が高い地域性があり、災害時等心配である 一人暮らしで孤立し、孤独に過ごしている人がいる
	母子政策の課題	知識もなく、周囲のサポートもない、孤独な育児をしている人がいる
	動き出せない人への対策	本当に支援が必要な人には、待っていただけでは手遅れになる
	無関心のために認識されない問題	隣の住民の顔も知らないし、人の大変さに共感もできない
SC活動への意欲	寄与できる	コミュニティの発展に寄与できることがやりがいに繋がっている
	反映される	市民ボラの考えが反映され、活動に主体的に取り組む意欲が増す
	PRする	自分の言葉でSC活動をPRしている
	評価する	SCでは自分たちで設定した目標を評価する
	要因を迫る	大きな怪我をしても受診しない人が多く、その要因を迫る必要がある
	きっかけとなる	社会からの隔絶された気がしていたが、ボランティア活動が変化のきっかけとなった
	思いを抱く	皆の気持ちや思いの確認をすることで励みが得られる 思いだけでは達成できないが、思いがないと何も始まらない
SC活動の実感	わかる	SCについて自分で話し、人の話を聞くことでSCがどういうものか解ってきた セーフコミュニティについて話して聞くことで解ってくるのが実感できた
	かかわる	行政側に促されて参加したが、今は市民ボラとして主体的にかかわっている
	歩み寄る	活動に参加し具体的なデータに基づき外傷予防の指導が受けられるようになった
	広がる	市民のほうから行政に歩み寄っていく姿勢ができてきた
	つなげる・つながる	住民が関わっていくことで広がっていく、やれていくことがある
	立ち位置の変化	公と民の差を踏まえ、市民から繋げていくほうがやりやすいことが分かった 市民の一人として自分の立つ位置が変わってきた

表3 思考レベルでSC活動を理解

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
SC活動の魅力	刺激がある	会合に行くといろんなことが知れて刺激がある
	設定できる	身近な目標を設定していきやすい
	試すことができる	どんどん新しい方法を試すことができる
	体験できる	体験を通してわかっていく、体感できる手ごたえがある
	わかり合える	時間はかかるが、一緒にやっ行くことで得られること、分かり合えることがある
	認められる	活動の内容やその過程がきちんと評価されるのが面白い
SC活動から見出した価値	つなげる・つながる	変わることができる人からつないでいく 様々なものを繋げていくことにSCとして取り組む価値がある 変わることのできる人からつないでいくことができるのは市民である
	自律と自治	行政や警察に求めるだけではなく、自律自尊が大事だと実感 SC活動で自治の精神が芽生えると実感
SC活動の収穫	活動資金が獲得できた	予算がないところでやっていたが、助成金がもらえ意欲が高まった
	プロセスが認められた	結果や効果だけではなく活動した取り組みがきちんと評価された
	場が得られた	どんな意見もとらずに否定しないで聞いたり、言ったりできる場がある 自分に適した活動の場が得られ外傷予防の機会がある
	参画の機会ができた	自分にも安心安全のまちづくりに参画できる機会がある
	仲間とつながれた	定例会に参加し皆の目標が共有され仲間意識やつながりが得られた

表4 意志レベルで取り組む SC 活動

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
市民活動の促進	学ぶ機会がある	SPSC について専門的に学ぶ機会がある
	具体的である	具体的な話だと共に取り組んでいけそう
	マネジメント役がいる	各種相談の交通整理役がいる
	柔軟性がある	型にはまった相談ではなく、状況に応じて対応できる場に育てていく必要がある
	情報が共有される	情報が双方で共有されていくとよい
	意見が言いやすい	自分の意見を言える雰囲気をつくる
	補い合える	良い意味でのすみわけと、互いに補い合う姿勢が必要である
市民活動の減退	こなすだけ	定例会では人集め中心、企画会議から下ろされた課題をこなしている
	わかりづらい	専門用語が多く市民にはわかりづらい。自分だけわからないのかと思うと質問や意見が言えない
活動の不安	モデルが身近にない	市民ボランティアと行政の協力・協働のモデルが身近にないからこのやり方でいいかわからない
行政への要望	ボラ活用機会の推進	市民ボランティアをもっと活用してほしい
SC 活動継続の秘訣	身軽さ	ボランティアには期限や宿題、ノルマがないのがメリット
	活用される	自由な活動の場を保障されるボランティアとして活用してもらおうが、ノルマは課せられない身軽さを保つ
	暖かさ	ボランティア活動で得た「気持ちの暖かさ」がセルフエスティームを高めた継続の秘訣となっている
	目指す	外傷予防プログラムの目標づくりに自分たちが参画でき、何を目指しているかわかる
	活かす	自分の視点が SC 活動に活かされる機会がある

表5 市民ボランティア活動の促進と後退

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
SC 活動への使命感	使命感と責任感を抱く	外傷予防プログラムに基づき問題解決に取り組んでいることへの使命感がある SC 活動の重大さと、一市民としての責任を感じている SC 事業と人をつなげていくのは市民である SC 活動の主体性は市民にある 誰かがやってくれるのを待つのではなく自ら SC を推進する
	目標設定がある	安全安心のまちづくりで、隣の顔も知らないことのないようにしたい 縦のつながりだけではなく横のつながりを作り上げていく
	役割認識がある	公の力だけでは補えない相談があり、それを SC 活動でつないでいく役割がある 様々な部署のデータが活用されるように繋げていくのは市民である きちんと数字を出して地域の人々に伝えることが大事
	活動へ触発される	皆が一生懸命「何かしたいんだ」というのがあって触発された
	主体的な姿勢	音頭よりは行政であっても、市民に主体的、継続的に関わる姿勢がある
市民活動の減退	こなすだけ	定例会では人集め中心、企画会議から下ろされた課題をこなしている
	わかりづらい	専門用語が多く市民にはわかりづらい。自分だけわからないのかと思うと質問や意見が言えない
活動の不安	モデルが身近にない	市民ボランティアと行政の協力・協働のモデルが身近にないからこのやり方でいいかわからない

IV. 考察

1) 感覚レベルで SC 活動を理解する

SC 活動に対する関心が湧いたきっかけは、地域の高齢化や独居高齢者の増加、冬場の高齢者の火災に対する危惧等の《高齢社会の課題》、育児の孤立化やひとり親世帯の増加という《母子政策の課題》を市民が実感したことであった。自ら支援を求められない対象への支援の対策と並行し、「隣の住民の顔も知らない」といった近隣とのつながりが希薄化する傾向の地方都市において《無関心の弊害》が浸潤していることへの危機感があり、【地域住民への関心】を強めることで払拭しようという意識が汲み取れた。(表2)

【地域住民への関心】は【SC 活動への意欲】へと繋がっていた。コミュニティの発展に《寄与できる》、市民の考えや意見が活動に《反映される》、自分の言葉にかえて SC 活動をよく知らない人々に《PR する》という行動化

が確認された。SC 活動は外傷予防プログラムに基づいているため、活動の成果が数値に現れ、自ら設定した目標を《評価する》ことができる。外傷の《要因を追及する》必要性を認識し、ボランティア活動への参加意欲を高めていた。

初めて取り組んだ SC 活動では、SC について人の話を聞き、自分の言葉で話し、SC に対する理解が深まり《わかる》感が増していた。市民ボランティアとして様々な事業に参加し、《かかわり》ができ、単に批判するだけではなく市民のほうから行政への《歩み寄り》がなされていた。SC 活動に熱心な市民に誘われて住民に関わることで従来の事業に《拡がり》が見られ、公と民の差を踏まえつつも市民からつなげていく活動の意義と手ごたえを得ていた。この経験を経て、市民のひとりとして自分の《立ち位置の変化》を実感していた。これらの感覚レベルで SC を理解した事柄は過去形で語られていた。

2) 思考レベルで SC 活動を理解する

セーフティプロモーションやセーフコミュニティについて分かってきた市民は、会合に行くと《刺激がある》、外傷予防プログラムの評価では地域の実情に合わせ身近な目標が設定し、行政と協働しながら新しい方法を試すことができると感じていた。さらに、結果重視の従来の評価と異なり、「活動の内容やその過程がきちんと評価されるのが面白い」という市民ボランティアもいた。SC 活動の体験を通し、体感できる手ごたえがある点に面白さを感じていた。「時間はかかるが、一緒にやっけて行くことで得られること、分かり合えることがある」という発言も聞かれ、《刺激がある》《設定できる》《試すことができる》《体験できる》《分かり合える》《認められる》ことにより【SC 活動の魅力】が構成されていた。

SC 活動の魅力は有形無形にある。市民ボランティアは SC 活動を通して人々や社会システムが《つながる》ことや、個々に活動していたものが《つながる》という価値を見出していた。SC 活動を通し、「様々なものを繋げていくことに SC として取り組む価値がある」と述べ、「変わることのできる人からつないでいくことができるのは市民である」という意識で取り組んでいた。さらに、一市民として、行政や警察に求めるだけではなく、自律自尊が大事だという実感を得ていた。SC に関するボランティア活動を通し「自治の精神が芽生えたと実感した」という発言も聞かれた。【SC 活動の価値】は《つなげる・つながる》ことを基盤とし、そこに《自律と自治》の意識が芽生え、市民ボランティアとして関わる価値が見出されていた。(表3)

SC 活動からは以下の収穫物が得られていた。例えば、予算がないところで活動していたが助成金がもらえ意欲が高まった。物質面、精神面で活動の場が確立され、「どんな意見もとりにあえず否定しないで聞いたり、言ったりできる場がある」と、肯定感の高まりがみられた。また、結果や効果だけではなく活動した取り組みがきちんと評価され、《プロセスが認められた》という手ごたえを得ていた。様々な市民がかかわってきたが「自分に適した活動の場が得られ外傷予防の機会がある」ことで「自分にも安心安全のまちづくりに参画できる機会がある」と実感していた。SC の定例会に参加し、行政と市民の目標が共有され、仲間意識やつながりができたことから《場が得られた》と実感し、《参画の機会ができた》《仲間とつながれた》ことが【SC 活動の収穫】であった。

3) 意志レベルで取り組む SC 活動

SC 活動に意志を持って取り組む市民ボランティアの原動力を構成するものに【SC 活動への使命感】があげられた。外傷予防プログラムに基づき問題解決に取り組むといった SC 活動の主体性は市民にあると自覚していた。誰

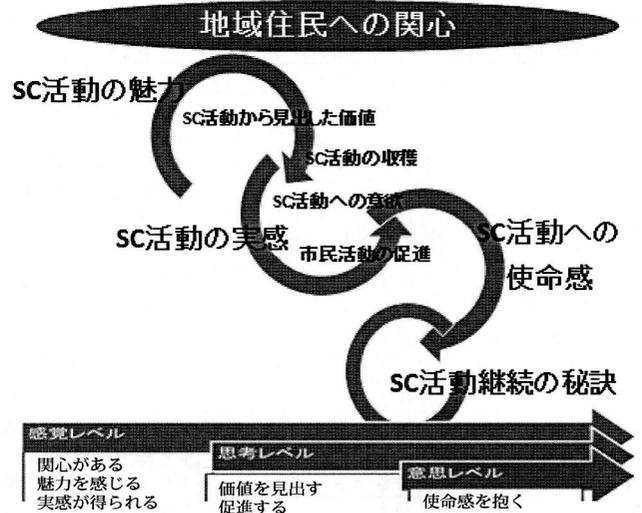


図3 セーフティプロモーションにおける市民ボランティアの変容のモデル

かがやってくれるのを待つのではなく、市民みずからが SC 活動を推進していくという使命感があると市民ボランティアから直接、現在から未来進行形の言葉で語られた。さらに、SC 活動とは何か理解を深めたことで、一市民としての責任感を感じ、主体的に関わろうとする意識と態度の変化がうかがえた。これらの変化を図3に「セーフティプロモーションにおける市民ボランティアの変容のモデル」として示した。市民ボランティアは SC 活動から見出した価値や収穫を実感し《使命感と責任感を抱く》ようになる。安全安心のまちづくりを市民、行政、企業等の協働で達成するために、「縦割り行政の壁をつないでいけるのは市民」という意志に基づき、SC 活動の縦と横のつながりが強化されていった。さらに話し合いで《目標を設定》し、各々が《役割を認識》するといった《主体的な姿勢》が形成されていた。このような市民の「一生懸命何かしたい」という気持ちの高まりがあり《SC 活動へ触発され》ていた。また、セーフコミュニティの認証には7つの指標が示されているが、そのひとつである部門を越えた協働に市民ボランティアが貢献していることが示された。

4) 市民ボランティア活動の促進と後退

SC 活動に関連する市民ボランティアは、SPSC について専門的に《学ぶ機会がある》こと、外傷予防プログラムが《具体的である》ため、専門や得意分野が異なっても共に取り組んでいけそうだと感じている等、高木らの研究結果と類似していた¹⁶⁾。しかし、SC については未知の部分も多く、各種相談の交通整理というような《マネジメント役がいる》との提言もあった。そして、各種相談の場は型にはまった相談ではなく、状況に応じて対応できる場に育てていく必要があり、そのためには、《情報

が共有される》ことや、自分の意見を言える雰囲気をつくったり、他人の意見を聞けたり《意見が言いやすいこと》を重視していた。

行政職員との関係性については、「良い意味でのすみわけと、互いに補い合う姿勢が必要である」と述べていた。市民ボランティアはSCの専門職ではなく、行政職員もSC活動は未知の取り組みであった。情報の共有やSCについて学ぶことで【市民活動の促進】がなされ、反対に《こなすだけ》の活動や《わかりづらい》説明は《市民活動の減退》につながっていた。(表4. 表5)

SC活動のボランティアとしては《モデルが身近にない》のでイメージが付きづらい点や、相談できる人が行政の人に限られてしまうことへの不満があった。市民が行政の縦割システムの中に入っていける機会は限られるため、《ボランティア活用機会》が乏しいと、やる気のある市民がいたとしても先ずほみの活動になってしまいかねない。しかし、課題を乗り越えて取り組み続けることができれば、【SC活動が継続】するといえる。「ボランティアには期限や宿題、ノルマがないのがメリット」という《身軽さ》をいかし、自由な活動の場を保障されることは、行政職員が異動で担当が変わってしまうことに対して、活動維持の強みとなりうる。SCボランティアとして活用してもらおうが、ノルマは課せられない身軽さを保ちながら、「うまく行政に使ってもらおうこと」を由とする立ち位置のものもある。ボランティア活動で得た「気持ちの暖かさ」が市民ボランティアとしてのセルフエスティームを高め、活動継続の秘訣となっていた。

SC活動は行政が主導しながらも、外傷予防プログラムの目標づくりに市民ボランティアが参画できるという魅力がある。まちとして何を目標しているかがわかることは、《目指す》方向を共有化でき、ボランティアに従事することで、「自分の視点がSC活動に活かされる機会がある」という手ごたえが得られ、これらのことが【SC活動継続の秘訣】と考えられた。

5) セーフティプロモーションに取り組んだ市民ボランティアの変化

Q市では戦略的にSCについて市民に理解してもらうことに重点を置き取り組んできた。リーダーは、人集めに始まり、人集めに終わる地域活動にはしたくなかったし、SC活動の参加者獲得の前提に、SCに対する理解が重要であると踏まえていた。

藤永らは、ボランティア活動の活発化に必要な要素について述べており、Q市の市民ボランティアの発言から「目的の動機付け」、「きっかけづくり」、「活動に関する学習」、「場所の提供」、「資金の獲得」等、類似のカテゴリーが抽出された^{17) 18)}。このことから、Q市においても同様に地域住民の現状への興味関心といった動機付けが根底

に据えられ、誘われ、学び、集い、活動資金が確保され、市民を巻き込む地域活動が促進されたと判断する。

しかし、市民を巻き込んだ活動であることだけで、このような市民ボランティアの変化がもたらされたとは考え難い。SC活動を通し、市民ボランティアは「様々なものを繋げていくことにSCとして取り組む価値がある」と気づき、「変わることでできる人からつないでいくことができるのは市民である」と、ボランティアとしての立ち位置を自覚している。地域の安全に関する課題について行政から提示された外傷データを基に、何が最も重要な課題であるか気づき、傷害や事故予防の大切さについて認識を高めていた。SCに関するボランティア活動を通し「自治の精神が芽生えたと実感した」という発言もあり、地域における市民の生活に影響を及ぼす活動に対して決定を下す権利があると述べる市民ボランティアもいた。そして、SC活動における自殺予防の取り組みでは、地域の傷害・事故予防のプログラムの実施と並行し国レベルの政策にも主体的なボランティアとして関わっていた。

SC活動では部門横断的に多くの組織が協働して政策が確立・実現されていく。Q市の市民ボランティアは利害関係を持たない自由な立場で参加しており、SC政策の理念の共有化や外傷プログラムの優先順位の話し合い、および、SCに関する学習会を積み上げていくなかで、市民ボランティアとしての意欲の高まりややりがいを得ていた。

コミュニティを基盤に展開される活動については塩鮑らの研究でも、公衆衛生の視点を持つ専門職がSCにかかわることで地域の繋がりが促進され、社会資源が有効に活用されると示されている¹⁹⁾。Q市は公衆衛生医や保健師がリーダーシップをとり、セーフティプロモーションを理解し、これまでの保健活動で積み上げてきた基盤を生かしセーフコミュニティづくりに取り組んできたという特色がある。多組織のスタッフやボランティア間の相互学習を促し、行政スタッフ、市民ボランティア、民間組織従事者の顔や性格がわかり、対象に応じて支援から指導まで様々な関わり方を工夫し、課題解決にむけて活動している。

表5では市民ボランティアがSC活動に対して使命感を抱き取り組んでいることが示された。越田らは一般市民と介護予防サポーターでは使命感や地域活動への意欲に有意差があることを示しているが²⁰⁾、本研究参加者の発言からも類似の発言が聞かれ、今後、ボランティア意識におけるオーナーシップ度の測定等を行い確認する予定である。

V. 結語

セーフティプロモーションの担い手である市民ボランティアの変化は、感覚、思考、意志のレベルで推移していた。地域住民への関心からSC活動に参加し、魅力を感じ、意欲が高まり、活動の実感や価値を得ていた。SC活動に対する使命感が活動を促進させ、継続の秘訣となっていた。

謝辞

本研究にご協力いただきましたQ市市民の皆様は心より感謝を申し上げます。本研究は平成20～22年度文部科学省挑戦的萌芽研究の補助金を受けて実施しました。

引用文献

- 1) 石附弘、倉持隆雄、平野亮二. コミュニティを基盤としたセーフティプロモーション活動の展開. 日本健康教育学会誌、2010; 18 (1): 298-308.
- 2) レイフ スバンストローム. セーフティプロモーションとは～世界に広がるセーフコミュニティ. 日本セーフティプロモーション学会誌、2008; 1 (1): 5-15.
- 3) National Research Council. Injury in America: a continuing public health problem. Washington DC: National Academy Press. 1985; 17-30.
- 4) 反町吉秀、鈴木隆雄、工藤充子、他. 「セーフティプロモーション」とは何か. 公衆衛生、2004; 68: 620-628.
- 5) 白石陽子. 日本におけるWHO「セーフコミュニティ」活動に関する研究－京都府亀岡市の取り組みを事例に－. 立命館大学政策科学、2008; 15: 81-96.
- 6) 白石陽子. 世界におけるセーフコミュニティの歴史と展開. 日本健康教育学会誌、2010; 18 (1): 42-50.
- 7) Safe Communities Network Members. http://www.phs.ki.se/csp/who_safe_communities_network_en.htm. (2013年1月17日にアクセス)
- 8) 新井山洋子、山田典子. 保健活動からセーフコミュニティをつくる. 保健師ジャーナル、2007; 63 (12):

1074-1079.

- 9) 山田典子、山田真司、川内規会、他. 住民が市民に変わる過程～セーフコミュニティ実践活動の成果～. 日本ヒューマンケア科学会誌、2011; 4 (2): 32.
- 10) 山田典子. セーフコミュニティに暮らしたい～安心なまちづくりを目指す十和田市民ボランティアのこころみ～. 東京: 梨の木舎、2010
- 11) 安梅勅江. ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法. 東京: 医歯薬出版株式会社、2001.
- 12) 安梅勅江. ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法2. 東京: 医歯薬出版株式会社、2003.
- 13) 安梅勅江. ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法3. 東京: 医歯薬出版株式会社、2010.
- 14) Fontana, A. Frey, J. H. The Interview: From Structured Questions to Negotiated Text. In N. K. Denzin, Y. S. Lincoln (Eds), Handbook of Qualitative Research, 2nd ed. Thousand Oaks, California: Sage Publications. 2000; 645-672.
- 15) 川喜多二郎. KJ法混沌をして語らしめる. 東京: 中央公論社、1986.
- 16) 高木寛之. 福祉施設におけるボランティア受け入れの方法に関する研究 ボランティア支援を通じた地域福祉推進のあり方. 大妻女子大学人間関係学部紀要、2011; 12: 85-97.
- 17) Horton JE, MacLeod ML. The experience of capacity building among health education workers in the Yukon. Can J Public Health、2008; 99 (1): 69-72.
- 18) 藤永健太郎、林かおる、石井拓美、他. 保健福祉分野における市民活動団体の活発化と効果的な行政支援のあり方の研究. 公衆衛生研究、2001; 50 (1): 34-38.
- 19) 塩飽邦憲、山根洋右、福島哲仁、他. 出雲市におけるヘルスケア政策確立のための参加型行動研究. 日本公衆衛生雑誌、1997; 44 (6): 464-473.
- 20) 越田美穂子、梶原明美、川田涼子、他. さぬき市における介護予防サポーターと一般住民の地域に関する意識と地域活動の比較. 四国公衆衛生学会雑誌、2012; 57 (1): 109-114.